芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 41　54. 1

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・浅　田　弘　明

高校生の文化活動に光を

大分県高等学校文化連盟会長
大分県芸術文化振興会議副会長　土　屋　元　造

本年8月、大分県で第3回全国高等学校総合文化祭が開催されることになりました。この総合文化祭という名称は、世間一般にはまだなじみが少ないと思われますが、それは、この文化祭が一昨年から始まったもので、歴史が大へん浅いことと、全国的行事でありながら宣伝が不十分で、一般に周知徹底をみていないということが原因と思われます。

ご承知のように高等学校の教科外活動の中にクラブ活動、部活動というものがありますが、これは大きくいって体育と文化の2部門に分かれています。そのうち文化活動には種々様々な種目がありますが、体育に比べて、内面的で地味な活動のものが多く、種目によっては公開の場を全く持っていないものもあるという現状です。こういう文化活動の成果に光を当て、さらにその振興を促すことが必要であるという観点から生まれたのが、この全国総合文化祭といえると思います。

文化庁では、高校生の文化活動に注目し、その助成を図ってきましたが、その集大成ともいえるものが全国構想のこの文化祭と考えられます。そしてその動機となったのが、実は本県で3年前に行なわれた大分県高等学校文化連盟主催の第1回中央文化祭であったということです。

第1回は千葉県で、演劇（全国高校演劇協議会のコンクール）、合唱、吹奏楽、邦楽、マーチングバンドと特別参加としての吟詠という内容でした。第1回であったため、参加人員、作品にやや地域的かたよりがありましたが、第2回は兵庫県で開催され、美術、書道、工芸がこれに加わり、全国的行事としてその内容も整って参りました。さらに開会行事の華麗さは参加者が異口同音に感嘆したところで、第2回の特徴ともいえることでありましょう。

そして、いよいよ第3回が大分県で行なわれることになったわけでありますが、本県にこれほど早い時点で実施の順序がまわって来たのは、本県高文連に対する期待の大きさに由来するものと考えられます。私ども関係者にとっては、まことに得難い機会と考え、せっかくの行事を意義あらしめるよう、主管の県教育委員会と協力して、最大の努力を傾注する覚悟を固めております。

現在、県下において秋の一大行事として大分県芸術祭が定着しています。県下の市町村の殆どで、芸術祭関連行事が行なわれていますが、その中に徐々に高文連出身者の活動があらわれることを待望したいものと思います。感受性豊かな若い高校生時代に、文化活動によって培われた創造性は、社会人になっても潤いのある毎日の生活をつくり出す精神の源泉となるものと信じます。この意味からも全国総合文化祭を機に高校生の文化活動について一層のご理解をいただき、今後もご指導ご援助をお願いしたいと思う次第であります。

能「道成寺」を上演して

社団法人・能楽協会会員　宮　永　育　子

上演中の宮永育子さん

女性では稀な鐘披きを許され、その感動が２年間のファイトを維持させる原動力となってこの度の上演を盛会のうちに納めることができました。

大分文化会館は、いわゆる能楽堂と異なり、地方の特設舞台では、大仕掛けの舞台装置で、釣鐘落下のタイミングが危険、と危ぶまれましたが、この能の盛んな大分の地に、実現したいのが夢でした。

元来能は、男の世界で、男性の芸として創り出されて居り、女の身で、どの様に道成寺の趣きを演じることができるか？　ということが最大の課題でした。

女性の感覚で、芸脈を探ると、清姫の凄まじい性の執念と、妖気の中に、女の哀しさが焼きつきます。これらのことを何とか心のあるものに表現し上演することでした。

前半の白拍子は、執心を内に秘め、不気味な「静」を、乱拍子は、小鼓の鋭い裂帛の気合に合わせた、「間」、の一騎打ちで、怨念、を表わし、一気に激情を放つ急、舞、鐘に吸い込まれると同時に、大音響の落下、ここは、芸の力より、精神力と体力をつくづく感じます。

暗闇での蛇体の変身。秘伝にて、糸くづ一つ落さず、鐘が上がると同時に、真正面に出現するのですが、６百年の風雪に築かれた伝統芸術だけに、過去の上演者が如何に芸を大切にしたか、窺える所作でした。

集中力を要求され、一つひとつの難関を破る脱皮でした。後半の「動」は僧の法力、と蛇体の戦いで、祈りと、糸を引く様なネバッコイ鐘への執心に、一瞬弱る柱巻き、と言うリアルな型は、冷静さを持ってしても、迫り来るものが有ります。

１時間30分、20数カ所の口伝の連続に、息もつけぬ緊迫感で、終わりました。

謡い声も、視界も、能面と言う仮面を通し、「間」で成就された能を、どれ程観客に、理解して戴けるか、不安でした。

正に道成寺は「百遍稽古」の一言（ひとこと）でした。身を持って自身で眼を開いて行く外に、方法はございません。

世阿弥の花伝書に、「40にして、真の花の探求なくば、能は下がるべし」この一言は本当にほろ苦い言葉です。

東京の若い新鋭の囃子方、家元や父、兄、着座の後見、暖かく見守って下さった観客が一体となって、舞台をささえて下さったお蔭と信じております。

能は、演出法や戯曲として、また美術の面で、簡素の中に、全く力強い構成の舞台芸術であることをあらためて認識させられるものでした。一般の方々に理解して頂くために演じる側として、厳しい精進を心より感じるこの頃です。

昭和39年　東京芸術大学邦楽科大学院卒
昭和43年　猩々「乱」を披く
昭和51年　石橋「獅子」披く

（[redacted]

第14回大分県芸術祭賞等贈呈式

県芸振会議共催第14回県芸術祭は、105行事という多数の参加によって県内各地で開催、この程終了しました。県芸術祭では、とくにすぐれた行事等に対し各種の賞を贈呈していますが、次の団体・個人に賞が贈られました。

贈呈式は、12月25日（月）11時から、県総合庁舎内73会議室で関係者一同出席して行なわれました。

なお当日主催者を代表して矢野県教育長、受賞者を代表して、県日本舞踊連盟理事長花柳有句秀氏の挨拶がありました。

受賞者紹介

名称		受賞者	行事名	受賞の理由
芸術祭賞		大分県日本舞踊連盟	日本舞踊創作の会	開幕行事として、古典ならびに創作を公演し、県民文化の向上に寄与した。
		大分県吹奏楽連盟	吹奏楽 ミ大分をうたうミ	閉幕行事として、県民の心をうたった意欲的な手法による創作の吹奏楽により、県民文化の向上に寄与した。
功労賞		ジュニア オペラ	あまんじゃくと うりこひめ	わが国でははじめての試みとして、ジュニアによるオペラを公演し、本県音楽活動に刺激を与えた。
		三保文化祭実行委員会	第6回三保文化祭	中津市三保校区をあげて文化祭を実施、内容も幅広く地域文化の向上に寄与した。
		十時（とき）良（りょう）	白秋を恋した女	簡潔な舞台装置の作製により、県民演劇の上演を成功させた。
		宮永颯扇会（さつせんかい）	宮本恒一独立40周年 宮永育子道成寺被 観世流能楽会	本県における能の水準をたかめるとともに、その普及に貢献した。
		院内町	第1回院内町教育文化祭	豊かで住みよい町づくりを目ざした文化祭を開催し、地域文化の向上に寄与した。
		チャーチル会大分	チャーチル会大分25周年記念作品展	絵画を楽しむ団体として発展、立派な実績をのこしている。
新人賞		村上美佐子	白秋を恋した女	新人にもかかわらず主役江口章子役に抜てきされ、立派な演技で観客に深い感銘を与えた。
		田村洋彦（ひろひこ）	吹奏楽 ミ大分をうたうミ	斬新な作曲法により芸術祭閉幕行事を成功させた。
感謝状	特別感謝状	辻英武		県芸振会議会長として、本県芸術文化の振興に寄与した。
		花柳芳次郎	日本舞踊創作の会	開幕行事の公演において、真摯な指導により、公演の成功に寄与した。
		藤間章作	日本舞踊創作の会	開幕行事の公演において、真摯な指導により、公演の成功に寄与した。
	感謝状	大分県番傘川柳連合会等81団体	第10回大分県川柳大会等99行事	県芸術祭に参加、行事を実施し、本県芸術文化の向上発展に寄与した。

大分県芸術文化基金（仮称）への提言

大分大学講師
大分県美術協会副会長
安部遊雲

既に、県芸術文化基金（仮称）については、大分合同新聞（12月27日ひとの欄・1月10日笛の欄）紙上でも、概略とその必要性及び困難さを指摘している。

芸術文化団体が活動するには、活動資金が必要である。活動資金は、活動する者が出すのが当然である。小額の資金、小数の会員から、質と量を着実に向上させ、築きあげてゆく姿勢が大切と思う。こうした歩みの中で、美協は県から補助金を出してくれるようになった。

よりよい活動には多くの資金が必要である。一例として、中央展（大分市）に止らず、多くの人が支部展開催を望んでいるが困難である。補助金がほしいと思うのである。

54年度は、補助金が半減されそうなので、新規事業等を加え、希望を陳情したが、実現は困難のように推察される。

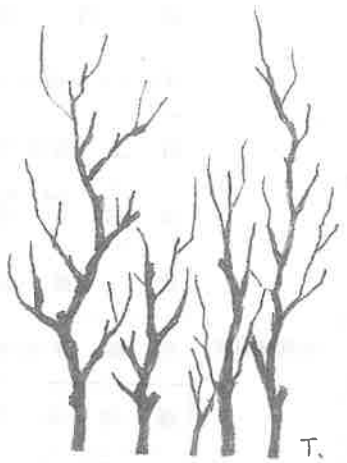
模索の末、着眼したのが県芸術文化基金（仮称）であろう。新聞でも指摘しているように、金集めは困難である。第1回会議後、常任委員に報告したところ、「あまり安受けあいをしてくださるなよ」という言葉がかえってきた。思えば、53年度に、美協関係の展覧会が5回開催され、その都度、前売券を多数依頼され、時には手銭を出す場合もあった。主旨には賛同しながらも、こうした声は当然かもしれない。

タイミングの悪い面もあるが、芸術文化基金（仮称）の設立は必要である。さて、基金をどうして集めるか？　会社関係・美術関係商・篤志家にお願いすることは勿論であるが、冒頭で述べたように、「先ず会員」が率先することが当然必要である。しかし、ことはこれからである。主旨を、広く、深く浸透させねばなるまい。先進県の事情も参考にして、本県にふさわしい方法を、多くの人々と話し合って決定し、実行してゆかねばなるまい。われわれの催すことを、見たり聞いたりして楽しんでいる方々をはじめ、たとえ、今そういう立場になくとも、子供が、孫が、何等かの影響を受けることを理解して戴き、大分県文化環境向上の一つの県民運動に盛りあげたいものである。

[redacted]

先般1月31日おこなわれた県芸術祭運営協議会の席上、今秋の第15回県芸術祭と県芸術文化基金（仮称）を関連づけて、盛り上げをはかってはどうかと言う意見が出された。『芸振参加団体ならびに会員は、たとえ少額であろうとも、「先ず会員から」の熱意を示し、入場料の一部や、運営経費の節約をはかり、率先して基金への拠出をすべきである』このことから、基金のための中間行事を持つことも一案ではないかと言う提言もあった。

（F）



大分県の文芸活動にかつを……

邪馬台・同人　矢　野　正　一

一部の限られた地域・職場には、熱心な同人誌グループがあるのかも知れないが、県下全般としては、芸術関係の他の分野に比して創作（小説）部門の活動は、極めて不振、低調のように私は思う。中津市を中心とする №40号 の邪馬台（季刊）湯布院町の「ゆふ」位しか、私は知らない。佐賀、熊本、福岡、宮崎、鹿児島、北九州、その他、全国で、月に110冊、1年間 1,200冊の同人雑誌が出ている現状からして、大分県は、余りにさびしいといわざるを得ない。

もちろん、それは、それなりに理由のあることではあろうが、創作・小説は、ある程度は、他律か、自己強制か、最初は無理してでも、書き始めねば、できるものではないと私は、思う。「中々手紙を書かぬ心理」と似ている。勿論、書かねばならぬ、やむにやまれぬ心機で書く作品を否定はせぬが（その場合は、詩の形式になる事が多い）。

やはり、理論はどうあれ、作品のできはどうあれ、まず書いてみることと思う。

大分県の文芸部門は不振と言ったが、潜在している文学人口は尠くないと思う。他の分野で、この人が文学創作に取り組んだら、すぐれた作品を書くだろうと思われる人も多く知っている。

同人雑誌の発行は「3号誌」といわれるように、その刊行、維持はむずかしい。熱心な同人と良きマネージャーと審査指導者がないこと。それに費用のことである。これも最近のようにファックス印刷機で、生原稿をそのまま、コピーでき、綴じて、安く雑誌をつくることもできる。活字にできれば、それにこしたことはないが。

私は、文芸に望むといえる立場の人間ではないが、同憂同苦の同志として、聴いてもらいたいのである。経験、反省として、自分でひとり胸の中に、小説構想や表現を包んでいるのもいいが、人に語ることが大切と思う。その感想もだが、話すことによって、自分の考えていないことも発見し、構想もハッキリする。その意味から、同人が集って意見をたたかわすことの意義は大きい。（ただ、文学志願の人間は一匹狼や、物ぐさが多い。）

たたかれても、没に何回なろうと書き続ける文学魂が、周囲に才をみとめ、育ててくれる指導者がいるか、誰か（これが問題なのだが）音頭をとって、まとめ役を買ってくれるか。大分県の文芸に狼火を揚げることは、むずかしくはないと思う。若い人の中に有望な新人の芽生えがある気がする。

（[redacted]

第15回県芸術祭・開閉幕行事決まる

◦開幕行事　「県民演劇」

『ふるさとが燃える』＝〃大分の空襲〃より

開幕行事には県民演劇と大分交響楽団が候補にのぼったが、話し合いにより県民演劇に決定した。

◦閉幕行事　「県児童文化祭」

今年は国際児童年でもあり、児童文化活動の進展を期して、作品展示部門と舞台上演部門に分け実施する。

第14回大分県芸術祭新人賞を受賞して

県民演劇「白秋を恋した女」の江口章子役　　村　上　美佐子

昨年５月13日、もう窓越しの日差しも強い日でした。県民演劇第６作目「白秋を恋した女」の為の新メンバーのオーディションが行なわれました。その結果、32名の新人群の１人として、この６作目に参加することになったのですが、上演までの半年間で何が一番思い出深いかと考えた時、今は不思議なことにこのオーディションのことが思い出されます。

８年近く離れていた大分へ帰って来ての５カ月間、大分で何かやってみたい、大分に根を下ろせる、打ち込める何かが欲しい。そう思う日々でした。そんな折に知ったのが県民演劇のオーディションでしたが、６年目を迎えるというその舞台もかつて観たことがなく、まして芝居の勉強などしたこともなく、応募するまでには随分と葛藤しました。いえ当日、自分の順番が来てまでもその最中に「帰ってしまおう、いや、やれるだけやってみて…」などと迷い続けていました。数日後参加を許された通知が届いた時は、例えようもなく嬉しくて、どんなことにでもぶつかってみようと、決心しました。

その後のキャスト発表で、江口章子役が与えられたのですが、迷いの多い臆病さが幸したのか、「私には果たせる役ではない」と公演の日まで心の内では思い続けながらも、遂に言えないまま、舞台の幕は揚りました。そして同じ昨年の暮には、思いもよらぬ芸術祭新人賞を、努力賞として頂きましたが、たとえ個人賞にしろ、決して私一人では頂けるはずもない賞です。ほんとうに、多くの方々に支えられ、助けられてこそ、与えられた役をなんとか無事に演じ終えられたのですから。

オーディション以降の事は新人賞も含めてあまりにも大き過ぎる事ばかりで、まだ整理できないということが、実感です。ともかく、逃げ出したい衝動に駆られながらも、芝居が好きなんだということにしがみつき、オーディションを受けた熱意が、江口章子に近づける一歩だった気がしています。

[redacted]

県民吹奏楽「大分をうたう」の作曲者　　田　村　洋　彦

私が「大分をうたう」という標題の作曲委嘱を受けて、まず心に浮かんだことは「いかに大分をうたうか」でありました。そして作曲中も、常に大きく立ちはだかったことは、どのようにして「大分をうたう」を盛り込んだらよいか、ということでした。大分県人としてまだ日も浅い私が、はたして充分に大分をうたうことができるだろうかと心を痛めました。

幸にも仕事の関係上、大分の民謡を採譜したり、音楽材を分析研究していましたので、それを作品の素とすると共に、多くの地元の人々との話し合いから得た大分の香りの印象をできるだけ多く盛り込むこととしました。さらに、演奏者に自由に演奏してもらう部分（グラフィック的、またチャンスオペレーション的要素）をとり入れて大分をうたうことにしました。

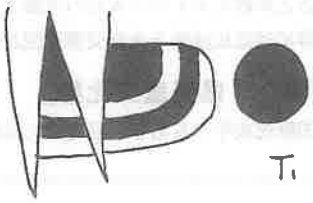
私がこの仕事をして一番嬉しかったことは、なんとひたむきで、研究熱心で、大きな情熱を持って音楽に取り組んでいる人たちの多いことかを知り得たことでした。

ともすればアイディアが浮かばず苦慮している時に、先に渡した曲の部分の練習に励んでいる人たちの姿に接し、気弱になりつつある自分を勇気づけられたことや、真夜中までも、尺八独奏をお願いした板井南桜山氏と研究討議したことなどが今はもうなつかしくさえ、思い出されます。

この度、はからずも県芸術祭新人賞を頂きましたが、作曲にご協力下さいました多くの方々と、演奏に携わって下さいました皆様とともに喜びを分かち合いたいと思うと同時に、いつの日か演奏形態は変わっても再び演奏の機会に恵まれることを願っております。

新しく設けられたこの賞の重みを今後の精進の糧にしたいと思う次第でございます。

[redacted]



県民オペラ10周年をかえりみて

大分大学助教授
大分交響楽団常任指揮者　加　藤　公　康

昭和43年、県民オペラのいわば旗上げ公演である「フィガロの結婚」を実現できた時の感激は今でも忘れられない。オペラの何たるかもよくわからないで、やみくもにスタッフ・キャスト共々、ただ熱と意気で突走った感じであった。正直言って準備の過程でとにかく幕が上るところ迄こぎつければ大成功、舞台の出来ばえは二の次というのが当時の我々の実感であった。それから今日まで10年。

「椿姫」「カバレリア・ルスティカーナ」「蝶々夫人」「魔笛」「カルメン」「吉四六昇天」など多くの作品を手がけて、今では練習のとりかかりから本番まである程度の見通しをもって事が運べる余裕を持つ事ができるようになった。そして技術的には貧しいところもずいぶんあるけれど、全体的にみれば本番の舞台にオペラらしい雰囲気が出てきたのも年月の積み重ねの成果であろう。

今年は滝廉太郎の生誕100年。日本における西洋音楽の歴史はまだ浅い。ましてオペラという劇音楽が日本人の手によって本格的に上演される様になってまだ50年もたっていない。しかも中央でないローカルな一地方でオペラ上演を計画する事自体大変な事である。決して十分なものができるとは自惚れてはいないが、とりわけ外国の名作オペラでは東京の二期会などプロの手によるものに比べればまさに学芸会程度かもしれない。しかし幸いな事に県民オペラは「吉四六昇天」というすぐれた創作オペラを持つ事ができた。もちろん、立川さんというプロの歌手を中心にでき上ったものではあるが、題材、音楽とも我々大分県人になじみ深い内容により、演技者も聴衆も一体となったオペラづくりに成功した。これは貴重な財産である。この上演によりヴィナーワルト賞、音楽の友社賞など日本的な音楽賞を受賞できた。県民オペラの活動は当事者の思っている以上に中央でも高く評価され、注目されている。我々は自信をもって一歩一歩地道な努力を続けなくてはいけないと思っている。

[redacted]

県民オペラ「吉四六昇天」

県民オペラ「カルメン」

《れんさい》 豊後水道の文芸 その1

大分大学教授　佐々木　均太郎

日向泊と浮城物語

「大分県豊後国南海部郡、旧佐伯藩領に日向泊なる一漁村あり、昔し神武帝東征の時、龍舟此地に泊せしを以て、日向泊の名あり」矢野龍渓の小説「浮城物語」の書き出しである。「浮城物語」は、明治二十三年一月から報知新聞に連載された。佐伯大入島日向泊生まれの青年上井清太郎という主人公が南太平洋に進出して大活劇をする冒険小説である。講釈師によって語られたほど人気のある読み物で、当時の青年たちの血を沸かせた。

日向泊は佐伯市大入島の豊後水道に面した小さな漁村である。筆者が訪れたのはもう二十年前。晩春の小雨が煙っている波打際にたたずんでいると老鶯がしきりに鳴いていたのを覚えている。「浮城物語」には「海辺、砂磧中の一小井、潮来れば海水の浸す所となり潮去れば瓢ち見はる。而して其水清冽、塩気を帯びず、伝へ云ふ帝、行営を置くに当り兵士をして穿たしむる所の者と、後人之を神とし名けて神井と云ふ」とある。

渚にある「神の井」という井戸のことである。神武帝が東征のみぎり行営され、掘られたという伝説。満潮時には波の底になるが湧き水には全く塩気がない。筆者も汲んでみたが確かに不思議に思った。それももう遠い思い出にすぎないが……。

神武帝一行が神の井を前にした構図は、故菅一郎画伯が佐伯中学（現鶴城高校）の応接室の大壁画にされていたが空襲で惜しくも爆破された。再度の力作は、現在佐伯市文化会館の緞帳の下絵となり残っている。「浮城物語」には、「藩政の時此村に里正（しょうや）あり。其家神井の傍に在るを以て神井を姓とす。後改めて上井とす。此職を世襲す伝て清衛門なるものに至り早く死す」その子の上井清太郎なるものが「浮城物語」の主人公である。

日向泊を後にした清太郎の大冒険が南太平洋を舞台に展開される。こういう構想の大きい小説の系譜が日本ではなにゆえか育たなかったのが残念である。

―つづく―

文化ニュース

◦県立芸術会館の催し

―展覧会―

大分の近世書跡展	2・10～3・11	入場無料	
労　美　展	2・13～2・18	入場無料	
九州グラフィック展	2・20～2・25	入場無料	
大分大学卒業制作展	2・27～3・4	入場無料	
西部書作家協会展	3・8～3・11	入場無料	
雲山人個展	3・14～3・31	入場無料	
日本刀名品展	3・15～3・30	一般	500円
		小・中・高	200円

―演奏会―

巌本真理弦楽四重奏団　3月3日（土）・開演18：30

入場料　S＝2,000円　A＝1,500円　B＝1,000円

◦県高校文化連盟主催により〝県高校邦楽研究発表大会日本の調べ〟が、12月16日県立芸館で行なわれました。
第1回の催しでしたが、仕舞・日舞・尺八・吟詠・箏曲・神楽・民謡・民踊・鼓・謡曲と多彩で、全部で27番の演奏が元気に発表されました。

◦軽食・喫茶〝GEIKAN〟が、県立芸術会館の北側に開店。
これからはお気軽に御利用下さい。

＜芸振だより＞

◦12月12日（火）13時30分から県婦人会館で、県芸振理事会を開催、文化基金（仮称）の件を中心に協議しました

◦〝松方コレクションを中心とした国立西洋美術館名品展〟が県立芸術会館で開催されました。
この入場券の販売につきまして、芸振加盟団体の皆様に格別の御協力を頂いていますが、お蔭様で会場は連日盛況で関係者一同感謝している次第です。
なお、代金や残券につきましては、お手数ながら2月15日までに県芸振事務局あて送付してくださるようお願いします。

◦今年は日本が生んだ偉大な音楽家滝廉太郎（1879.8.24―1903.6.29）の生誕100年に当ります。
県音楽協会や県芸術文化振興会議などが中心となって、これを記念する事業が計画されています。
なお郵政省は、8月24日に記念切手を発行することになり、県音楽協会等関係者は記念切手の発行を歓迎しています。

管楽器の専門店
技術の
アンドー楽器
大分交響楽団事務局
大分県吹奏楽連盟事務局
大分県職場音楽連盟事務局
〒870 大分市都町3丁目5－13
（ジャグル公園北側通り）　TEL 33－1627